

賢者の子裁判

—新出土のガンダーラ彫刻—

小 谷 仲 男

一

私は昨年一九七一年から今年の春にかけて、発掘報告書づくりにかかっていた。それは京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊が一九六三、六四、六七年の三回にわたって発掘したタレリ Tareli というガンダーラ仏教寺院址の調査報告である。この調査隊を率いたのが水野清一先生で、昨年の五月二十五日に、肝硬変で二年ばかりの療養のまいなく亡なられてしまった。六十五才で、まだ多くの仕事をのこして逝かれて残念でたまらない。私もこの調査がはじまった第二日目、一九六〇年から先生につきしたが、現地指導していただいた一人であり、いつまでもさみしいおもいである。先生が亡くなられる前に、調査隊は六冊の報告書を刊行したが、まだ二冊のこった。その一冊が『タレリ（パキスタンにおける仏教寺院の調査、一九六三〜六七）』で、これが出版されると、既刊の『メハサンダ（パキスタンにおける仏教寺院の調査、一九六二〜六七）』京都大学一九六九年刊、とあわせ、調査隊が古代ガンダーラでおこなった二寺院址の発掘報告ができあがる。

ガンダーラは、現在のパキスタン北部の一角にあたり、アフガニスタンと国境を接するところで、ここが仏像誕生のふるさとである。仏像あるいは仏像礼拝ということは、仏教とともにはじまったのではなく、ブッダの死後五〇〇年ほどたって、西暦紀元前後に地中海世界とインドとの文化交流が活発となった結果出現した、一つの歴史的所産である。このいきさつは本学論集第五号「アフガニスタンのギリシア人都市——アイ・ハヌム遺跡——」のなかですこしふれておいた。しかし、たとい、仏像出現の契機が外来的なものとしても、いったん尊像がつくられると、視覚的にうったえる仏像の礼拝は、仏教信仰の本質といえるほどの重要なみをもってきた。仏像の誕生がなければ、仏教が中国や日本ま

で、はるばる流伝したかどうかわいたがわしいほどである。ガンダーラは仏像をもった仏教美術の発祥の地である。

いま、ガンダーラ美術を概観したり、問題点を指摘するのが本旨でないので、ごく簡単にするが、ガンダーラ仏教美術の主体は、緑泥片岩 (schist) に彫刻された石彫である。灰色から青灰色をおびる。仏教美術でありながら、作風がギリシア風なところに特徴がある。ガンダーラ石彫をおおまかに分類すると、つぎのようになる。

(1) 独立彫像 (仏、菩薩などの礼拝像、ほかに守護神、供養者像など)、(2) 画像浮彫 (本生仏伝図)、(3) 装飾類 (花繩、列龕帶、花文、葉文、唐草など)、(4) 建築材 (柱形、軒蛇腹、剝型、ほか仏塔細部)

ガンダーラには石彫のほか、ストウコ (石灰塑像) や泥土像があるが、時期的には石彫より遅れて流行する。ストウコ作品には、石彫分類 (1) に相当する礼拝像、とりわけ仏像が量産され、(2) の本生仏伝図のたぐいはごくわずかとなる。独創意欲の点では、ストウコは石彫ほど力がない。

さて、京都大学が発掘調査したタレリ寺院址では、大小断片をふくめ、石彫三、〇五一点、ストウコ八〇五一点が出土し、メハサンダでは石彫一、〇〇六点、ストウコ三、〇九七点であった。タレリはガンダーラ山間寺院址のなかでも規模の大きなものの一つで、それにくらべメハサンダはやや小さな寺址である。それにもかかわらずメハサンダでストウコが増加しているのは、寺院の年代が新しいことを意味する。出土彫塑の内容は、右に分類したとおりであるが、タレリ報告書の私の分担は、このような遺物の整理記述であった。

点数の多いことや私の知識不足で、一年あまり費したが、この春でようやくあきらめた。分類上の (1)、(3)、(4) については、さほどの問題があらなかったが、(2) 画像浮彫 (本生仏伝図) については手間がかかった。いわば絵ときである。ここに仏伝図というのは、ブッダの今世の生涯 (たとえば、マヤー夫人の右脇からの誕生、ボダイ樹下のさとり、鹿野苑の初転法輪、サーラ双樹のもとの入滅など) を、石板に浮彫したものである。本生図とは、ジャータカ、つまりブッダの前生をえがくものとされる。ブッダの前生があるときは鹿、象であったり、またあるときは修行者、王子であったりするが、そのつど慈悲、利他の行為をつんで、今世にさとりをうく身をえたと説く。要するに、インドで古くから親しまれていた民話、動物を主人公とする寓話、偉人伝を、仏教がとりいれ、ブッダのすぐれた前生談に転用したのである。仏典のなかではいちばん文学味をそなえたものかもしれない。

ガンダーラ美術に先立つ古代初期インド美術（パールフットやサーンチーなど）では、まだ仏像表現ということを知らなかったで、ブッダの登場する仏伝よりも、本生図のほうをこのんでえがいている。ガンダーラでは逆に仏伝のほうが多くなる。

こうした絵とき、つまり經典と画像の内容との固定は、今世紀のはじめに、フランスの仏教美術史家A・フーシェが、当時発掘されたばかりの材料をつかって立派な業績をのこした。

* A. Foucher, — *L' Art Gréco-Bouddhique du Gandhāra*, Tome I, Paris 1905.

この書には挿図として五〇〇点あまりのガンダーラ彫刻がのせられている。現在でも、ガンダーラ図像学についてはいちばん詳細で、信頼できる書である。私も報告作製のさいには座右において参照した。ことに出土品が断片となっていてはあい全体の内容をうかがうのに役立った。

しかし、出土品を調べていくうちに、同じ主題であっても新しい構図のものをみつけることができ、またA・フーシェ書に未見のものも、いくつかつけ加えることができた。たとえば、A・フーシェが、ガンダーラでは表現されなかったのではないかと推定した「四門出遊図」や、めずらしい主題の「死んだ女が子を産んだ話」、そうしてここにのべる「賢者の子裁判」などがそれである。

ところで京都大学のタレリとメハサンダの発掘は、必しもガンダーラ彫刻に新発見のものをつけくわえることに価値があるのではない。その点では両遺跡とも早くから知られていて、なんとか先人の発掘をこむったので、理想的な状況とはいいがたかった。しかし、綿密な発掘によって、これまでなおざりにされてきたガンダーラ彫刻の歴史的、考古学的うらづけをえたことに、京都大学報告書の大きな意義がある。この点については本報告にゆずって、本題にはいっていくことにしよう。

二

これからのべるのは、私がタレリ出土品中の一画像浮彫を「賢者の子裁判」と同定したいきさつである。

この図像は図版に示すとおり、ひじょうに保存もよく、なにか物語を表現したものである。婦人が二人、小さな子供をあいだにはさんで立っている。

報告書作成の過程で多数の画像を同定したが、なお数点内容のわからぬものがのこった。小断片が破損がひどく、将来も同定の可能性のない



ガンダーラ石彫 賢者の子裁判 タレリD区塔院第十四祠室内出土 20×17cm
(京都大学 イラン・アフガニスタン・パキスタン)
学術調査隊 写真 № 64-2300



ガンダーラ石彫 パンチカとハーリティ像 ペンシャーワル博物館 高101cm

ものとはかく、右のように図像のはっきりしたものを内容未定としてのこすのは、残念であった。

婦人と子供のとりあわせで、だれしもがおもいおこすのは「鬼子母神」の話である。

鬼子母とは夜叉女ハーリティ女神のことである。老鬼神王パンチカの妻となり、一万の子供（あるいは一千とも五百ともいう）をもうけ、そのもっとも幼い子をピンガラといった。鬼子母は強暴で人の子供をとって食べるので、人々は困りはててブッダに嘆願した。ブッダはそこでかの女の最愛の子ピンガラをとらえて仏鉢の下にかくした。鬼子母はくまなくさがしたがみつからず、悲嘆にくれてブッダの前にあら

われた。ブッダがさとしていうには、「おまえは多くの子供をもっているが、唯一人を失っても、そのように愁え悲しんでいる。世間の母親には一人か数人の子供しかいないのに、おまえはそれを殺して食べているではないか」と。鬼子母はこれまでのことを悔い、これからけっして子供を殺さないことを誓って、末子をかえしてもらった。（『雑宝藏経』第九、ほか）

鬼子母がブッダに帰依して以後、人々から供物をうけて子供をまもる神となった。子供のまもり神となった鬼子母神の像は、ガンダーラ石彫にもかなりある。鬼子母一人と子供たちの像もあるが、上掲図のように、夫パンチカとらんでこしかけ、子供をまわりにおく図像が多い。

しかし、タレリ図像のように子供一人しかなく、まして婦人像が二人ならぶのでは、鬼子母教化の話にむすびつけようがない。なにかほかにびったりする内容をみつけねば

ならない。私の乏しい知識ではまにあわず、またひとところにとどこおっていては、全体の報告書づくりがすすまないの、一応内容未定ということでそのばをすませた。とにかくガンダーラ未見のめずらしい石彫であることにまちがいない。

しかし、それから幾月もたたぬうちに、おもわぬところからヒントがでてきた。それはたまたま私が大手前女子大学史学科の演習テキストとして学生諸君とよんでいた H. G. Rawlinson, *India in European Literature and Thought (The Legacy of India, Oxford 1937)* の論文である。「ヨーロッパ文学および思想におけるインド」という表題が示すように、ヨーロッパの思想や文学のながれのなかにはいつているインド文化を、時代をおって眺めた論文である。それは古代ギリシア哲学に影響をあたえたとかんがえられるインド哲学や仏教であり、中世、近世ヨーロッパ文学に多くの素材を提供したインド説話、近代ロマンティズム運動に受容されたインド思想やサンスクリット文学についての叙述である。

たしか、一九七一年十二月ころとおもいますが、テキストの下よみをしていたときに、おもわずはっとする文章にぶつかった。

ソロモンの裁判の話は、そのひじょうによい例だ。仏教側の話では、二人の女が子供を両側から力いっぱいひっぱりあうように命ぜられる。ところが子供が泣きだすと、一方の女はたちまち手をはなしてしまう。そこで賢明な裁判官は、かの女のほうを真実の母親として、子供を引渡す。(前掲書 P. 23)

さて、右のソロモンの裁判の話はともかくとして、インドに二人の女が子供をとりあう話がある。二人の女と一人の子供は、タレリ浮彫りの内容ではないか。さいわい、H・G・ローリンソンの論文に註が付してあって、インド側の話の出典が、Rhys Davids, *Buddhist Birth Stories*, I, xiii, xlv (London 1880) にていふのである。

ソロモンの裁判の話は有名なものであり、手もとの『旧約聖書』で確かめみると、

二人の遊女が同じ屋根の下にすみ、どちらもほとんど日をたがえずに子供をうんだ。ところが、一人の女は夜中子供とそいねしているうちに誤って窒息死させてしまった。そこでもう一人の女の子供と、こっそりとりかえた。朝になって二人の女のあいだにいいあらそいがおこり、ついにソロモン王の裁判をおおぐことになった。王は剣をとって、「生きている子供を半分に切断して、それぞれに与えよう」といったところ、実の母親は「どうか子供を殺さないでください。子供はその女にあげます」といい、一方の女は頑として二分を主張する。そこ

でソロモン王は眞の母親をみつけた。

「イスラエルみな王の審理^{さば}きしところの判決を聞きて王を畏^{おそ}れたり。そは神の智慧の彼のうちにありて審理をなさしむるを見ればなり」
（『旧約聖書』列王紀略上）とある。

さて、インド仏教側につたわる話はというと、さきのライス・ダヴィズの書は京大蔵書にあり、すぐに閲覽できた。その書はパーリの『本生因縁談』(Jataka - nidanakatha) の英訳本であるが、その序説にヨーロッパ文学の祖型となったジャータカ(本生談)をいくつかとりあげ、英訳して紹介している。問題の話はそのなかの一つで、もっと正確な出典は、パーリの『ジャータカ註釈本』(Jatakathavannana) からきたものとみえる。そして『ジャータカ註釈本』については、E. B. Cowell and Rouse の英訳があり、その Jataka No. 546⁵ としてのっている。

*E. B. Cowell and Rouse, *Jataka*, Cambridge 1895—1907, Vol. VI, p. 163, *The Mahā - Ummagga - Jataka* (大隧道本生第五話)。

なお和訳としては、『南伝大藏経』第十九卷、pp. 15—17にある。

いまその話を紹介してみるとつぎのようである。

一人の女が子供をつれて賢者(未来のブッダ^{菩薩})の池へ水浴にいった。まず子供をあびさせて、自分の上着のうえにやすませたあと、つぎに自分も水浴におりていった。そのとき、一人の夜叉女^{ヤクシニ}(鬼女)が子供をみて、むしように食べたくなった。人間の女に化けてちかづき、母親にいった。「こんにちは、この子はほんにかわいいこと。おまえさんの子供かい。」そうだと返事がかえってくると、女はすこし抱かせてもらえまいかとたずねた。そうしてしばらく抱いていたが、やにわに子供をつれて逃げだした。母親はこれを見て、あとをおいかけた。「いったい私の子供をどこへつれていくの。」やがて女をつかまえた。ところが夜叉女^{ヤクシニ}は平気でいうではないか。「おまえさんはどこで子供を得たというの。これは私の子供よ。」そうして二人は大声でいいあらい、賢者の裁判堂の前にさしかかった。賢者はそのさわぎをきいて、いったいなにごとがおこったのか、そして自分の仲裁をうける気はないかどうかききにやらせた。かの女たちはそれに同意した。そこで賢者は地面に線^{ヤクシニ}をひき、夜叉女には子供の腕を、母親に足をにぎらせて、「子供は、この線より自分のほうにひきこんだほうのものだ」といった。二人は子供を両側からひっぱりはじめたが、母親のほうは子供の痛がる様子を見て胸もはりさけんばかりになり、手を放して、そのばに泣きすくんでしまった。そこで賢者はまわりのものにあざねた。「子供をもつ母親と、そうでないものとどちらの心が赤

子にたいし、いつくしみぶかいか。「まわりのものは口をそろえていった。「賢者よ、それは母親の心です。」「では、みんな、いま腕に子供を抱いている女と、手をはなしてしまった女と、どちらが母親とおもうか。」「手をはなしてしまったほうが母親です。」「ではみんなはもう一人が泥棒であるとおもうか。」「賢者よ、私たちにはわかりません。」「これはまさしく夜叉女^{ヤクシニー}で、子供をとって食べようとしたのだ。」「賢者よ、どうしてそれがわかりますか。」「かの女は目が赤く、まばたきしない。また影がなく、恐れがない。無慈悲である。それでわかる。」「そして賢者は女のほうにむかって詰問した。「おまえはだれか。」「旦那さま、私は夜叉女^{ヤクシニー}です。」「なぜ子供をつれさろうとしたか。」「旦那さま、子供を食べようとおもったからです。」「賢者は女を叱責して、「この馬鹿ものめ、前生の悪い報いで夜叉女^{ヤクシニー}にうまれてきたのに、いままた罪をかさねるのか。」「といい、かの女に五戒を守ることが約束させて、放してやった。一方子供の母親は、賢者をほめたたえ、「どうか旦那さま、いつまでもお達者で。」「といって、子供を胸に抱いて立去った。さて、そこでもう一度問題の図像をみてみよう。

姿かっこうのほぼ同じ婦人がむかいあって立ち、膝もとに小さな子供がいる。子供は右手で一人の婦人の裾をにぎって、ややみあげている様子。婦人のほうはとよくみると、どちらも右手をつきだし、力んでいるせいか、下着の肩紐がずりおちかけている。左手は裾をすこしもちあげているかっこうで、やはりなにかいいあらそっているのではないかとおもわせる。

それにしても均齊のとれた美しい婦人像である。婦人の髪かざりは、ともにヘア・ネットか小さな帽子で髪をおさえ、余した房を額の両側に垂らしている。うすい下着のうえに、サーリーをはおり、端を左肩にまきつけている。二人とも豊満な乳房をもったやさしい母親の姿である。

上手に化けたもので、どちらが鬼女ともわからない。おそらく、もとはこの像のかたわらに、もうすこし彫刻があつて話の内容をわかりやすくしていたのではないかとおもう。発掘の状況ではこれ以上にわからないが、どうもこの話しを表現したものとおもう。

以上が私のタレリ図像にたいする同定である。名づけて「賢者の子裁判」とした。

三

どうやら偶然のチャンスで、図像の内容を決したが、知識の不足はおおいがたく、おおい体系的な研究にすすみたいとおもっている。これ

で一応報告書にたいする役目をおえたが、その後日談をすこしかきそえておきたい。

インド説話のゆたかな発想、人を感動させるうまさ、にひきづられて、そのごもしばらく、千鴻竜祥『ジャータカ概説』（鈴木学術財団、一九六一）や、岩本裕『インドの説話』（紀伊国屋新書、一九六三）などをよんで勉強してみた。そして、ある大学の非常勤講師の控室で毎週顔をあわせる小南一郎氏（現在京大人文科学研究所助手）にも、タレリ画像のことをはなして見た。小南氏は中国の小説の起源に関心をもつので、なにかの話のたねにでもと、はなしかけたのである。しかし意外な返事もどってきた。さきのジャータカ（賢者の子裁判）やソロモン裁判の話の流布を、中国や日本まであとづけた論文があるという。

それは南方熊楠みなかたくまぐす「大岡越前守子裁判の話」で、その明治の民俗学者南方氏の全集がいまちようど平凡社から出版されつつあり、その論文をおさめた巻は、もう出版されているはずという。

さっそく書店にいったさがしてみる。たしかに『南方熊楠全集』2、（平凡社、一九七一）、六八―七四ページに「大岡越前守子裁判の話」（大正十二、十三）がある。ひごろよみなれてる論文とちがひ、註らしい註もなく、自由奔放に必要なことをかきたてるといった調子である。しかし資料の探訪は広範囲におよび、しかも確実のようだ。やはり、中国、日本にもこの話の伝播がたどれる。

このあたりまで、まだ書店での立ちよみであるが、さて、全体の内容はどうかと目次をくってみると、さらに驚くべき表題がとびこんできた。「死んだ女が子を産んだ話」（前掲書、二四―三二ページ）——これがそれだ！ これには少々説明があるが、やはりタレリ出土品の一つである。話の内容はわかったが、それをのせている経典がなんであるかわからないものである。それは石彫断片で、画像の左部がのこり、ブツダが立って、裸の子供に手をさしのべているものである。これと同主題の浮彫をさがすと、A・フーシェの書にはのっておらず、H. Ingholt, *Gandhāran Art in Pakistan*, New York 1957, fig. 121 でみつけた。その浮彫は完好で、一九二一―二二年に、ジャマール・ガリ寺址から発掘され、現在ペシャーワール博物館に陳列されている。解説をみると、つぎのような話である。

ある若き王妃が、他の王妃たちから生まれ、讒言のすえ殺されるが、前生の功德により、死んだ身で、墓中で子供を産みそだてたという。

しかし出典を記していない。ジャマール・ガリの発掘報告 *Annual Report of the Archaeological Survey of India 1921—22*, Simla 1924, pp. 59, 60 にあたってみると、その同定は、H. Hargreaves によってなされていることがわかった。しかし、そのかれが出典をかかなかったの

である。そこで私はその内容をかいた経典を知りたくおもしろい、いつもお世話になっている京大人文科学研究所宗教研究室の荒牧典俊氏にもいろいろ相談してみたが、容易にみつからずいた。それがまたここにあつかわれていた。表題だけだが、同一話にちがいない。出典もわかるはずだ。もう立ちよみのいとまなく、さっそく購いもとめて家へいそいだ。

結局、『南方熊楠全集』から、いろいろと学んだが、ここでは一つ一つかく余裕はなく、簡単にのべるにとどめたい。

まず「賢者の子裁判」の出典について。パリーの『ジャータカ』第五四六―五のほかに、そのものの漢訳ではないが、ごく簡単にした話が、『賢愚因縁経』巻一一、檀膩鞞品（『大正藏経』四、p. 429）にのっていることを知った。ただし、そこでは夜叉女ヤクシニーの意識はきえて、他人の女がいつわって母親と称して子をあらそったことになっている。

それから大岡越前守子裁判の話までの流伝については、まず中国で、後漢の応劭撰『風俗通』（現行本にはなく『古事類苑』法律部一、一一七三ページに引用）に同様な話があること。同居する嫂あによめと弟嫁との実子あらそいで、その原因に財産相続のことをからませている。そして日本では、『小槻季継記』（同じく『古事類苑』法律部一、一一七三ページに引用）に、女二人が八才の男子をあらそう話がある。以上はソロモンの剣による二分とちがって、子供を両側からひっぱりあう話になっている。そうして、実母と里子の母とがあらそうあの大岡裁判の話は、そうした材料をもとに、講談師などがたくみに大岡裁判にむすびつけてできたものと、南方熊楠氏は推測している。ほかにアラビアにもインドのジャイナ教説話にも類話があることを紹介しているが、それをよむと、どちらも子供のからだを二分するという話になっている。

これらの類話のうち、もっとも古く、祖型となるものは、どれかというと簡単に結論がでない。『旧約聖書』該当部分の成立については、私によくわからないが、南方熊楠氏らもかんがえるように、やはりインドからの流伝であろう。おそろしい人食い鬼女ヤクシニー（夜叉女）が人間の女に化けて子供をうばおうとし、それが知恵者にみやぶられて難をのがれるという話は、ひじょうに素朴な、インドらしい民話形態をそなえている。それがソロモンとかブツダとかの偉大さをほめたたえる話に転用させられるのは、そのあとのこととかんがえられるからである。パリーの『ジャータカ註釈本』の編纂と北魏沙門慧覺の訳した『賢愚因縁経』の成立は、ともに西暦五世紀ころとかんがえられる。しかし、ジャータカないし説話自体の発生はもっと古くさかのぼり、紀元前二世紀ころの古代インド、パールフットの玉垣に、その内容のいくつかが浮彫されている。

そして「賢者の子裁判」については、古代初期インド美術には例をみないが、もしガンダーラ新出の浮彫がさきに同定したとおり、そうであ

れば、いちばん古い実例となる。その時期は、発掘によっておおよそ見当がつく。この浮彫が発見されたタレリD区塔院からは、ほかの多くの石彫とともにクシャン王フヴィシュカの貨幣（西暦一七一―二〇三年ころ）がいくつか出土しており、大部分の石彫はそのころの製作とかんがえられるからである。

とにかく、この新出浮彫像は内容的にみてもおもしろく、また図像の保存がよいうえ、出土状況がはっきりしているので、ガンダーラ美術遺品のなかでは、価値だかいもの一つになろう。